

鈴木伸治

志野作家

2022 年 9 月

鈴木伸治独占インタビュー（PART 2）

現在桃青京都ギャラリーでは鈴木伸治さんの個展を開催中です。

今回は鈴木さんのインタビュー記事Part2をご紹介します。



桃青

一雲のように長石がついたオブジェはどのようにして生まれたのですか？

長石というのはちょっとの層の違いで何万年もの違いがあるんです。僕達の少し前の世代は長石の不純物の少ない良い層を高いお金を出して買うのが当たり前だった。結局みんな大トロが欲しいんですよね。でもその大トロの部分っていうのはどんどん枯渇していく。ただ僕は同じ長石なのに、まったく見向きもされない層があるのは同じ長石なのに、なんだか可哀想な気がしたんです。良い素材を使って良いものが出来るのは当たり前。でもそれだけじゃなくて、自然のものをどうやって活かすのか、その可能性を引き出してあげられるのがいい作家だと思うんです。そうやって僕の長石シリーズは始まったんです。



(写真:工房におかれていた長石が雲のようにつくオブジェ)

一実際どのようにして作るのでしょうか？

この作品の為に崩れやすい鉢のような器を作って、それで囲ってガス窯で焼きます。ただその形がただ丸型だとあまりにも囲まれている感じが出てしまうので、形状を石の形に合わせて作り、あとでその鉢を崩して取り除き完成させます。

技法が確立するまでは釉薬に石をまぜてかき混ぜて、瞬時につければくっつくんじゃないかとか、ステンレスの網を使ってみたりもしましたが、もう全滅でした。とくに金属は酸化が進むと金属の粘り気が無くなりポソポソになっちゃうんですね。

この長石シリーズは薪窯だと長石が爆ぜてしまうので、自分でつくったガス窯で今も焼成しています。

一薪窯だけでなくガス窯もご自身で作られたんですね。

薪窯を作るまでは本当に20年近くこのガス釜一本でやってきました。後輩が工房見学に来てくれた事があるんですが、余りにも小さい窯なのでびっくりされちゃったり(笑)

桃青

僕の中で自分の窯を持つことは第一に考えていました。人の窯を使っているとやっぱり遠慮してしまって無難な作品しかできないので、自分の窯を持って挑戦して失敗を沢山しないと分らないですよ。



(写真: 鈴木伸治さんがつくられたガス窯)



(写真: 2020 年に完成した薪窯)

桃青



(写真:薪窯の中の様子)

—釉がけについて教えてください。

沢山釉薬がある状態で、大きい物から釉薬をかけていくと思われる方も多いのですが、実はその逆なんです。ぐい呑み、茶碗、水差し、オブジェとそれぞれ作品によって生地分厚さも異なります。大きくて生地が分厚いと、釉薬を沢山吸い込むので、作品によって濃さを変えていきます。大きい作品は薄めないと、釉薬を吸いすぎちゃうんです。逆に言えば、大きい作品にぴったりの釉薬の濃さはぐい呑みにだと薄すぎるんです。なので釉薬は濃い状態で小さい作品へ先にかけていき、徐々に薄めて大きい作品にかけていくんです。とはいっても、この薄さの違いなんて、微々たるものなんですけどね。

僕は失敗した作品も取っておいて、釉がけのテストに使います。それで釉がけの流れを作ってから本番に入ります。轆轤だとあと一時間やろうとか、くぎりをつける事はできますが釉がけは、気候の影響も受けるし、沈殿も早いので、一時間離れると、釉薬のコンディションも流れも変わってしまうシビアな作業です。だから釉がけをする時は家族には僕はいないものだと思ってくれと伝えますね。おむつを履いてでもしたいくらい、大切な作業です。

—紫志野はどのようにして生まれたのでしょうか

志野自体失敗続きで何をどうしたらいいのか分からず手探りの状態でした。いろんな人を尋ねたけど、こっちの情報を吸い取られるだけで、根拠も無く長く焼けばいいんだって言われるばかりでし

桃青

た。挙句の果てに志野なんか一生かけて一皿焼けたらいい。70 か 80 歳になった時にいい物が焼けたらラッキーだなんて言われる始末。そんなんじゃ一生いい物は焼けないと思って志野一本でとことん研究するって決めました。

そんな中、伊藤秀人さんと話をする機会があったんです。伊藤さんは磁器をメインに活動されている先輩で、東京で個展をしたり、賞をとったりと地元では花形の作家さんでした。その伊藤さんが個展で志野のぐい呑みを数点出しているのを見つけ、すぐに連絡をしたら“家くる？”と快く招待してくれました。いろいろ話しているとお昼時になったのですが、さっと美味しいパスタを作ってくれて、しかも盛られて出てくるお皿がオシャレでね。もう何年も前だけど、その時の事は今でも良く覚えています。先輩は僕のテストピースを見ながら“俺も始めたばかりだから分からない。伸治が上手いなくて悩んでいるのは分かるけど、俺にないのはこの色だ。俺にはこの色は出せない”そう言われたんです。今までいろんな人に会ってきたけど、こんな風に客観的に見てもらえたのは初めてでした。ずっとこの紫は失敗だと思っていたけど、逆にここを伸ばしていったらいいんだなって思えたんです。

—素敵なお話ですね。では最後に、志野を通して伝えたい事がありますか？

志野は溶けやすくする為に灰を加えたり、成分を調整する化学の長石釉ではなくて、長石そのものだと思っています。だからどのような長石を使うのかどのような料理の仕方をするのかで変わってきます。良く志野の定義は何なのかと聞かれることがあるのですが、使う窯なのか、長石なのか、もぐさ土なのか、あとは釉薬の下に書く鉄絵は OK だけど、上絵は描いたらダメだとか。そういう事を決めなくてもいいんじゃないかなって思うんです。志野の面白さを形にしていけば自分が楽しくなるし、気持ちいいんです。時々のかみ方で作風も変わってきます。

個展では、とにかく沢山のの人に自分の作品を見て欲しいですね。遠方に住んでいたり、人それぞれ制限は沢山あるとは思いますが、画面上で物が動く便利な時代だからこそ、やっぱり足を運んで頂けたら嬉しいですね。写真の平面だけで伝えられないもの、分からないことを感じて欲しいです。

桃青

鈴木伸治展もいよいよ今週 9 月 24 日までとなりました。

会期残りわずかとなりましたが、ぜひこの機会に鈴木さんのエネルギー溢れる作品群をご愉しみいただければと思います。みなさんのご来廊お待ちしております。

©2022 Tosei Kyoto Gallery. All Rights Reserved.

—